循環型林業の町で 地域材による家づくり

ＦＳＣ認証材による家づくり

02　下川町の循環型林業と産業クラスター
04　地域のリーダー　下川町森林組合
05　地元のＦＳＣ認証材による家づくり
06　関連事業者レポート

下川町ふるさと開発振興公社
クラスター推進部

01

町産材活用住宅による 地域経済活性化施策

町産材活用住宅助成制度

09　美幌町の概要と森林認証
10　町産材活用住宅助成制度
11　森林認証材住宅の現状と課題
12　多岐に渡る低炭素な町づくりの取り組み

北海道美幌町

02

「つくばスタイル」で 県内の山と町をつなぐ

住宅振興地「つくば」の地元工務店

13　住宅振興地「つくば」と地域材
14　「つくばスタイル」木の家クラブ
15　木の家クラブの活動と今後の課題
16　関連事業者レポート

「つくばスタイル」木の家クラブ

03

暮らしの中から 森と都市をつなぐ

水源の森と暮らしをつなぐ活動

22　女性設計者が集まった森想人
23　様々なイベント参加を通じた活動の展開
24　水源の森の木で住まいを創る
25　関連事業者レポート

森想人

05

東京/森の木の家 プロジェクト

長期優良住宅先導的モデル

18　東京家づくり工務店の会
19　東京/森の木の家プロジェクト
20　取組の実践　効果と課題
21　関連事業者レポート

東京家づくり工務店の会

04

「つくばスタイル」で県内の山と町をつなぐ

住宅振興地「つくば」と地域材

「つくばスタイル」木の家クラブ

03

つくばハウジングパーク（住宅展示場）

「いばらきの家」モデルハウス（住宅展示場内）

住宅振興地「つくば」

茨城県の南西部に位置するつくば市は、北に関東の名峰筑波山を擁し、東に霞ヶ浦を控えた、田園風景の広がる平野地域です。成田空港を有する成田市にも近く、1985 年には万博（国際科学技術博覧会）が開催されました。また、東京にある国の試験研究機関等を計画的に移転することにより東京の過密緩和を図るとともに、高水準の研究と教育を行うための拠点を形成することを目的とした筑波研究学園都市としても位置づけられ、中心地には数々の国の研究機関が建ち並んでいます。

2005 年には、首都圏最後の新線と言われた、つくばー秋葉原間を最短 45 分で結ぶ「つくばエクスプレス（TX）」が開通し、首都圏の通勤圏内の新たなベットタウンとして、つくば駅周辺の沿線地域や県南地域では大手住宅メーカーやデベロッパーを始めとした住宅地開発が活発化し、行政や研究機関、建築家や民間団体など、様々な関係者による新しい住宅や町づくりが展開されています。つくば駅と研究学園駅の中間に位置する「つくばハウジングパーク（住宅展示場）」には、メーカーその他各社 32 棟のモデルハウスが建ち並んでいます。

南東部太平洋沿岸には鹿島臨海工業地帯が広がり、輸入材の供給も盛んで、ベイマツ原木の関東圏への供給拠点にもなっています。一方で、茨城県北部地域には、古くからの優良な木材産地があります。福島県から栃木県の県境を南下し筑波山まで続く八溝山地では、杉や桧の植林地が多く、昔から林業や木材産業が盛んな地域です。しかし、同じ県内にも関わらず住宅開発が盛んな県南部では、県北部からの主要な木材流通も無く、県内に木材産地があることさえ知られていないのが一般的です。

材木屋からはじまった「地元」への取組み

「つくばスタイル」木の家クラブは、地元の民間建設会社である（株）茨城県南木造住宅センターが手掛けている活動ですが、県産材への取組みは、材木屋である親会社、（株）角幸から始まっています。（株）角幸は、明治 43 年に中村材木店として創業以来、幾度かの商号変更を経て現在に至る、古くからの地元材木屋です。

「地元」へのこだわりは 30 年ほど前、当時の節有り材は材木ではないという風潮や、輸入材や集成材の需要が拡大する状況に対して、現在の会長の、茨城にも使える木がたくさんある、節有りや無垢材をもっと使おう、という思いから始まりました。また、材木屋は木材を売るだけでは駄目で、ちゃんと使える木材を提供し、かつ地元の大工が地元に合った家づくりをやっていけるようにしなければと、県内の材木屋や工務店に声をかけ、地元の木材住宅を振興する協同組合を設立しました。そこで開発し売り出されたものが「いばらきの家」です。県の協力も得て商品開発や共同分譲などが行われました。

その後、協同組合形式では住宅建設において責任の所在が不明瞭であったため、会社組織に変更し、県南、県北、県央の 3 地域に株式会社を設立し、各々 10 年ほど事業を展開しましたが、県北、県央は事業が立ち行かなくなり廃業、県南のみ、つくばエクスプレスの開通を機にもう一頑張りしようと存続しました。その中で「つくばスタイル」木の家クラブの活動も始まっています。

茨城県南木造住宅センターは地元の一住宅会社ですが、このような経緯から協同組合時代からの実績や志を引き継いでいるため、現在でも地域の材木屋や大工、行政などからの協力が得られています。

「つくばスタイル」で県内の山と町をつなぐ

「つくばスタイル」木の家クラブ

「つくばスタイル」木の家クラブ

03

「いばらきの家」モデルハウス（内部）

森林見学会

木の家クラブの発足

「つくばスタイル」木の家クラブの活動拠点である「いばらきの家」は、（株）茨城県南木造住宅センターのモデルハウス兼事務所です。「いばらきの家」は開発以降その都度改良が加えられ、現在のモデルハウスは第５世代と呼ばれるもので、太陽や風など自然の力を活かしたパッシブデザイン（神戸芸術工科大学教授、小玉氏協力）を採用し、構造材や仕上材などへ積極的に県産材を活用した住宅です。

活発な宅地開発に伴い、大手メーカーの住宅ばかりが建ち並ぶ町になりつつあり、地域工務店や職人などの地元の力や「いばらきらしさ」、「つくばらしさ」の喪失を防ぐため、地元の業者が地元で活躍できる仕組みを作ることを目的として、2006年８月にクラブが発足しました。木の家に暮らしたい、納得の家づくりをしたいという住まい手に、いいものを選ぶための知識と選択肢を得てもらうため、各分野のプロフェッショナルが集まり、様々な情報提供を行うと共に、家を買うのではなく、地域の力によって創るということにこだわり、郊外ならではの潤いと楽しさ、都市的な快適さ、つくばならではの地的な環境、を享受できるライフスタイルを「つくばスタイル」と位置づけ、活動を展開しています。

『木の家クラブは、住宅開発が活発なつくばで生き残っていくために、早い段階から会社のファンを育て、家づくりの潜在的な顧客を囲い込んでおきたいという思いと、社内だけでは出来ることが限られるため、出来るだけ外部の力を得て総合的に木の家の魅力を発信したいという思いから始めました。お客さんにも様々な情報を得てもらいつつ、自分達も勉強していくということが、現実的かつ効果的だと思います（木の家クラブ事務局長）。』

木の家クラブの仕組み

木の家クラブは、一般ユーザー（メンバー）を中心に、家造りに関わる各分野の専門家（サポートメンバー）が取り囲む形で構成されています。メンバーには家に関する情報をしっかり学びたいという人が多いため、家づくりに必要な土地の情報、設計の情報、木材や職人、インテリアなど、満遍なく情報を得られるような形としてスタートしました。

また、茨城県では住まいに関する様々な情報を発信する拠点に対する「茨城住まいの情報館認定制度」があります。県の助成制度や県で活躍する建築家の紹介など、銀行のローン窓口や建築行政機関などが認定を受けています。一民間企業には利益にならない情報もありますが、民間のモデルハウスとしては唯一「いばらきの家」が認定を受けています。

「つくばスタイル」で県内の山と町をつなぐ

木の家クラブの活動と今後の課題

「つくばスタイル」木の家クラブ 03

家づくりワークショップ

メンテナンス教室

木の家クラブの活動

クラブでは土曜又は日曜に開催する各種イベントを中心に活動しています（年 10 回程度）。メンバーと各種専門家との交流を主目的に、山側の林産地を体験する森林見学会や木材市場・製材所見学会、木造建築現場見学会、近隣の若手建築家との座談会、家づくりワークショップ、家の絵本の読み聞かせ会、地域の和紙を使った手作りランプシェード教室、組子コースター教室など、メンバーからの立案によるイベントも多いそうです。モデルハウスを利用した、家のメンテナンス教室も開催されています。モデルハウスも時間が経つと、床板の傷の付き具合や壁のお手入れ方法など説明しやすいとのことです。イベントのスタッフは全て社員で、費用も全て自社の持ち出しで行われているため、参加費は物を作る時などの材料費のみ、各イベントの講師に対しては、講師にとっても営業できる場が得られるので講師料等の支払いはしない、という考えで行われています。

『木の家クラブをやっていて一番良かったことは、参加しているサポートメンバー（各種専門家や業者）のつながりが強くなったことです。今まではつながりが希薄でしたが、お互いに意見や情報交換が出来るようになりました。自分自身にとっても、建設会社には話し難いが、他のサポートメンバーには話せるようなこともあるのだなと、ユーザーの色々な視点からの話を聞くことができ、勉強になっています。木の家クラブの活動を始めて、住宅の受注が増加したということには至っていませんが、クラブのイベントに参加した人は、家を作ったあとの満足度がとても高いように感じています。家を作った後も継続してイベントに参加してくれる住まい手も増えています（木の家クラブ事務局長）。』

県産材の取組、今後の課題、環境指標

県北に木材を生産する林産地があり県南に木材を使う住宅ニーズがあるのに、これらを結ぶ流通がないので取組もうという理由から、建設会社にとっては問屋や建材店などを通した方が、木材の品質も安定して良いのですが、協同組合時代の製材所等の仲間も多く、製材所から直接木材を購入する形で、県産材利用に積極的に取組んでいます。最初はなかなか協力を得られなかった製材所でも、木材をコンスタントに発注することで、着実に協力を得られるようになりました。現在年間 20 棟ほど手掛けている住宅では、県産材 100％の住宅は約 8 割、一部梁や床に輸入材を使う場合もありますが県産材を全く使わない家はなく、モデルハウスが出来てから、県産材のニーズが圧倒的に増えたそうです。

『今後の課題は、森林や木材以外の土地やインテリア等の基本情報の質の向上です。もっと多くのサポートメンバーを巻き込む必要もあります。県産材の品質の確保も課題です。製材所はみな小規模なので、特に乾燥に時間がかかり納期に影響しています。また、環境指標は可能であれば使いたいですが、現場にとっては難しいものが多いです。モデルハウスの来場者にいきなり難しい話はできません。もっと簡単に説明できる指標が欲しいです。マークなどは分かりやすいと思います。ウッドマイルズは県産材を使う理由として説明し易く、お客さん達にも評判がいいですが、茨城県では県産材の定義が「県内にある工場が生産したもの」なので、全ての材の流通ルートを具体的に辿り数値化することが困難な状態でもあります。数値ではなく、木が好き、居心地がいい、といったところで選んでもらっているのが現状でもあります（木の家クラブ事務局長）。』

「つくばスタイル」で県内の山と町をつなぐ

関連事業者レポート

「つくばスタイル」木の家クラブ

03

90 年生のヒノキ林（佐藤林業）

常陸太田市森林組合

佐藤林業

県内でも林業の盛んな県北地域（常陸太田市）で、先代からの山を引継ぎ３代目として専業林業を営んでいるのが佐藤林業の佐藤さんです。木の家クラブとの付き合いは３年ほど前に製材所から紹介を受けたことがきっかけで始まり、木の家クラブの森林見学会も年に数回受け入れています。茨城県南木造住宅センターでも、製材所を通じて佐藤林業の木材を多く購入するようになりました。

佐藤林業では年間約 800m3 の原木を販売していますが、その内約 7 割が市場へ販売、残りの約 3 割は立木のまま直接販売しています。八溝山系はスギの植林地が多い地域ですが、寒い地域で杉の凍裂が多いためヒノキに変更し、所有する 156ha の山林は、スギが 4 割、ヒノキが 6 割です。この辺りの地域はヒノキの北限地域でもあるそうです。

佐藤さんは森林ボランティアの受入や地域の勉強会なども積極的に行い、地域林業のリーダー的存在でもあります。８年前から続けている森林ボランティアは、会社を定年し山仕事をしたいという人達がいると知人から打診を受けて始めたものですが、福島や千葉という県外からも参加者が来て、今では林業の仲間になっています。また、林業経営が厳しい中、周囲の林家は小規模林家かつ山仕事の知識や技術を持たない所も多いため、地元にも声をかけ、一緒になって林業教室などの地域教育も始めています。

『住まい手の森林ツアーなど、外部の人達が来てくれることはとてもためになります。今までは山側の関係者だけの世界でしたが、エンドユーザーの顔が見えることはやりがいが出ます。１人では行き詰ることでも、色々な人が来て交流が広がれば、色々なことがプラスになると感じています（佐藤さん）。』

常陸太田市森林組合

地域の森林整備と木材売買を主な事業としている常陸太田市森林組合は、木の家クラブの見学会その他の相談に応じてくれる協力者でもあります。この辺りの地域は古くからの林業地なので、団塊世代以上の人達は山に対する関心も高く、きちんと手入れされた山も多いそうですが、材価の低迷という厳しい現状では経営が成り立たず、専業林業は２人しか残っていないとのことです。20 年前までは、この地域の材も九州や青森まで流通していたそうですが、今は流通する価値がありません。地域の大工も地域に仕事が無いため、市街地に出て大手メーカーの仕事をしています。

『佐藤林業さんの活動は注目しています。みんなでやれば色々なことが出来ます。周辺地域の山にもずいぶん手が入ってきました。佐藤さん達を見ていて、意識の高い人達がやればだんだん良くなる、このような活動が各地で少しずつ変えていくしかないと思いました。まずは山に関心を持ってもらって１度でも見に来てもらうことが大切で、我々山側の業界は今までこのようなことをやってきませんでした。製材所や工務店など一民間企業だけでの活動は厳しいと思いますので、見学会の企画など、森林組合に積極的に相談してもらえたらと思います。

しかし、地域材を積極的に使うという人はまだ少数派なので、木材の使用量で考えると山を救うまでには至らないのも事実です。木を生かす仕事が少ない現状では、木を使う大工の技術が伝承されないことも心配です。林業の現場では安全、効率のため機械化が進んでいますが、環境保全を訴える山仕事で、大量に化石燃料を使う重機を増やしていいものかなど、考えてしまいます（常陸太田市森林組合職員）。』

「つくばスタイル」で県内の山と町をつなぐ

関連事業者レポート

「つくばスタイル」木の家クラブ

03

皆川製材所

野上製材所

皆川製材所

茨城、福島、栃木３県の約 20 ㎞県内から原木を調達し、構造材、羽柄材など、地域の杉材を供給する製材所で、出荷先は９割が市場、残りの１割が工務店で茨城県南木造住宅センターもその一つです。戦前から４代目となる皆川製材所は、以前は地域に桧が少なく首都圏に桧の得意先もあったことから主に桧を挽いていたそうですが、現在は杉を主に年間約 5,400m3 の原木を取り扱っています。茨城県南木造住宅センターとの取引は、グリーン材が主であった当時、天然乾燥をやっていたので一緒にやろうと誘われたことから始まりました。今でも数ヶ月天然乾燥させ、機械乾燥は仕上げとして使っています。

『昔は 1～2 年、エネルギーを使わずに天然乾燥して使うのが普通でした。強度や含水率の表示は、本当に良いもののための指標ではなく、クレームを無くすための指標だと思います。本物の木であれば、割れるし節もあります。これらを本物の木の証として正直に売ることが大切で、使う側も即決せず、じっくりと時間をかけて理解してから使ってもらうことが理想です。木材の価格もしっかりと説明すれば決して高くないはずです。今の材価では、山の再造林までは不可能で、林家も次々にやる気をなくしている状態です。杉の苗木生産が盛んな地域なのですが、肝心の山の再造林に使うお金が、林業経営だけでは捻出できない状態です。

また、原木調達は 20 ㎞圏内なのでウッドマイルズも優秀ですが、木材の環境指標は、排出する CO2 の削減も大切ですが、何よりも山の CO2 吸収に繋がることが大切です。そして消費者マーケットではなく、あくまでも治山治水、国土保全を主目的とした活動であるべきだと思います（皆川製材所社長）。』

野上製材所

八溝の地域は杉を挽く工場が多いですが、野上製材所は現在の３代目から桧を始め、最初は桧の造作・羽柄材を、その後工場を増築して桧の構造材を生産しています。原木の取扱量は年間約 6～7,000m3、今はプレカット工場が主流なので構造材の量が多くなっています。原木調達エリアは 70 ㎞県内程度で、原木市場からと山から直接の２通りあり、床板などで必要となる高齢級の原木は、近場ではほとんど無いそうです。出荷先は水戸、つくば、土浦等で、8～9 割が市場、残りが工務店です。

『一本の原木からは構造材、羽柄材、板材など様々な材が取れるので、製品を絞り込み大量生産することは、大規模な山林家でないと無理です。うちは小規模なので、小ロット、多様生産で対応するため、様々な丸太を仕入れています。大手メーカーのようなニーズには対応できません。製品市場への出荷は量が売れるメリットがありますが、その先のユーザーが見えないことが欠点です。「つくばスタイル」のように、実際に使う人が見えることはとてもいいです。見学会などの企画も、昔から地域の小学校等からの見学会があったので、全く苦ではありません。

現在取引のある工務店は数社ですが、多少注文内容が変わっても、定期的なユーザーになってもらえると助かります。もちろん仕様を標準化してもらえればより多くの量を出すことも可能です。正しいかどうかは別として、強度や含水率などの要求品質にも応えられるようにしなければと思っています。

ウッドマイルズの様な地産地消のための環境指標は、小規模なところにとってはとても有難く、地域での囲い込み無しでは、地元の小規模製材工場は、生き残れないのも現状です（野上製材所社長）。』